



令和3年度

鹿児島県の教育

7月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会特別支援学校長部長
福田 雅紀

多様性を認める教育を

先日、小学校教員時代の教え子のAさんから、この春、大学を卒業して教員免許を取得したという連絡があった。彼はADHDの診断を受けており、小学校では通級指導教室に通い、中学校では二次障害を起し情緒が不安定になったため、自閉症・情緒障害特別支援学級（自・情特学）に入級して学んでいた。その後、私立の高校に通い、東京の大学に進学しており、節目節目で連絡をくれていたのだが、正直、小学校や中学校時代の彼の姿からは、教師を目指すことは想像もできなかった。特別支援教育が学校教育法に位置付けられるから十五年目となるが、県内小・中学校の特別支援学級（特学）在籍者数は、平成十九年度が千三百人に対し、令和三年度は七千三百五十人と五倍を超える状況である。特に、自・情特学の増加が顕著で、これは全国的な傾向だ。特別支援教育への理解が深まったことは間違いないが、自・情特学の場合、本来入級しなくてもよい子どもが通常学級で不適応を起こして入級するケースも少なくない。また、一旦特学に入級した子どもは卒業までそのままということが多い。

しかし、自・情特学に在籍する知的障害のない子どもたちは、特別支援学校の対象ではないので、原則、高校へ進学することになる。したがって、必要があり特学に入級した場合でも、状態が落ち着いてきたら、できる限り通常学級で学習できるよう支援することが不可欠である。日本人は「保全性」の高い国民性であり、保全性が高い組織では、協調性が重んじられ、異質を排除するメカニズムが働きやすいと言われている。通常学級で教師の指示にスムーズに従えない子どもが、特別な支援が必要という理由で特学入級に至るケースも多い。しかし、教師が発達障害の特性を理解し、自己有用感を高める支援をすれば、通常学級で学習できる場合も多いと思う。多様性を認め合う学級集団は、人を思いやり、相手を尊重することができる子どもを育てるが、逆に、教師が多様性を受け入れられない学級は、子どもたちも自分と価値観の異なる人を受け入れることが難しくなる。教師を志すAさんも、高校、大学と大変な苦労があったことは容易に想像できる。それでも保護者や教師、そして仲間から励まされ、支えられてここまでくることができたと思う。彼を認め、支えてくれた方々に心からありがとうと言いたいし、他の子どもたちにも、多様性を理解し、支えてくれる方が増えるよう切に願いたい。

令和3(2021)年7月号

一般財団法人 鹿児島県校長会館
〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13
振替 02030-1-3192
TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷
鹿児島市東坂元二丁目29-1
TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	ある日の校長講話	11
随想	2	話のひろば	13
提言	3	読書案内	15
わが校の学校経営	5	趣味・文芸	18
子どもが輝く教育	7	郷土の紹介	19
心に残るひとこ	9	編集後記	20



飲み手の笑顔のために

宇都酒造株式会社
代表取締役 杜氏 宇都 尋 智

お酒というものは、楽しさを倍にし、悲しみを半分にし、人と人との繋がりを円滑にするために存在していると思っています。人は美味しいものを食べ、飲んだ時に笑顔になる、お酒は人生を豊かに潤いを与えてくれます。美味しい焼酎を造ることが、飲み手の笑顔に繋がる、そう信じて。

焼酎蔵で生まれ育ち、幼いころから技術者である「杜氏」（製造責任者）の姿を見続け、いつの日か蔵元でありながらも杜氏をしている自分を想像するようになっていました。子ども心に、真剣にテキパキと焼酎を造り続ける「杜氏」や杜氏の補佐をする「蔵子」の姿は私に強烈な印象を与え、純粹にかっこよく見えていました。中学生になるころにはどうすれば杜氏になれるかを考えていて、行きたい大学に入るために高校を決めたくらいでした。全国でも数少ない微生物を専攻できる学科を持つ東京農業大学醸造学科（現応用微生物学科）に入学することがとりあえずの目標でした。醸造学科は多くの専門的な知識を得るために、全国から微生物に関連する職種を目指した若者たちが集まり、共に勉強し、夢や希望を語り合い生涯の仲間と出会う場所ともなりました。もちろん大学生というモラトリアムを楽しみながらでしたが・・・。

醤油、納豆、パン等の製造業を中心に大手企業に限らず中小企業の技術力のある企業に多岐に渡って就職しており、卒業生は今現在も、だれでも知っているようなメジャーな食品、商品の開発に携わっています。

さて、私は大学を卒業すると同時に和歌山の清酒蔵に就職をし、泊まり込みで清酒造りに参加させてもらい、そこで覚えた技術や知識、知恵を鹿児島での焼酎造りに生かすことを目的の一つとしていました。三年間の修行を経て鹿児島へ帰郷し、焼酎杜氏である黒瀬杜氏の下で五年仕事をした後、前任者の定年をきっかけに宇都酒造の杜氏となりました。

杜氏になったばかりで最初の一仕込み、今でも強烈に覚えているのは、それまで前任の杜氏の下で行っていた作業が、自分のみが責任者となった途端、震えるほど怖かったのを記憶しています。米麴を造るのに米蒸しをするのですが、洗米時間を何分何秒、水切りは・・・、蒸し時間は・・・、発酵させる温度は・・・何時間するのか、失敗の許されない環境の下で、他人の責任にかんがえて作業してきたのかを痛感する出来事でした。そんな自分も杜氏になってから十四年経ち、中堅と言えるくらいの経験をさせてもらいました。今でこそ応用が利くようになってきましたが、初心を忘れることなく製造に携わっていただければと思っています。

略 歴

- 二〇〇一年に東京農業大学 応用微生物学科卒業
- 二〇〇一年 田端酒造株式会社 入社
- 二〇〇四年より宇都酒造株式会社入社
- 二〇〇八年より杜氏（製造責任者）
- 二〇一六年 代表取締役就任 現在にいたる

焼酎の味わいもここ二十年で、麴やさつま芋の品種の違いであらゆる味わいや、香りのする焼酎が多く出されるようになりました。当蔵も「紅はるか」を使用した焼酎で巨峰（ぶどう）のような香りのする甘い焼酎になり、女性にも人気のある焼酎が出来上がりました。

また、今こだわっているのは「酸」です。例えば発酵温度を高めにもっていくことで酵母を通常とは違う環境に置き、酸の役割が発揮されています。焼酎に甘さをのせ、柔らかさを引き出しています。本来酸は嫌われる要素ですが、そのぎりぎりのところの旨さを目指しています。一度の温度、そのわずかな差に潜む旨さにたどりつこうと日々目を凝らし耳を澄ましています。

芋焼酎はさつま芋の穫れる秋に一年に一回（三か月程度）しか造るチャンスはありません。「焼酎造りに完璧や終わりはない」と引退した先輩杜氏がお話されていたことを思い出します。油断や慢心を戒める言葉ではありますが、現場仕事を六十五歳まですると考えても私にあるチャンスは後二十回程度しかありません。一造り一造りを大切に、自分の求める味に少しでも近づけるよう、飲み手のみなさんが笑顔になるよう、心を込めて造っていきます。



GIGAスクール構想における学び

国頭小(大) 中村 健三郎

一 はじめに

日本一のカジュマルの前で子どもたちとのグータッチが始まる朝。その後、体育服に着替えて全校児童は、鬼ごっこで走り回る。

国頭小学校は、校訓「明るく・たくましく・考える(徳・体・知)」を掲げ、「日本一のカジュマル」の如く、たくましく・美しく、「カジュマル」に学び、くじけず・やさしく」をキャッチフレーズに、日々教育活動を展開している。

特に、郷土の伝統芸能(「やっこ・仲里節」や「黒砂糖作り」)、「カジュマルの塩作り」等の郷土素材を学習しながら、地域の歴史や文化に関して子どもたちに伝承を図っている。更に「沖永良部外洋遠泳大会」や「校運動」(縄跳び)等で心身ともにたくましい子どもへの育成をねらっている。

本校の最重要課題は、学力向上である。この課題克服のためにも、まさに郷土に根ざして鍛えられた明るさとたくましさの上に、考える力をしっかりと身に付けさせていきたい。

二 「GIGAスクール構想」の指導への活用

「GIGAスクールへの対応」に関しては、指導場面だけではなく、「教育課程の実施状況や学校評価」、「児童生徒の実態調査やアンケート」等各種調査、「キャリア教育への活用」、「コミュニケーション能力の育成」等の、対応の幅は多岐に渡っているようである。

本稿では指導場面と評価について若干の論点を付与させていただきたい。

たちには、ICT(情報通信技術)機器を活用した学習を通して、これまで以上に情報活用能力を身に付けることが求められている。そのためGIGA(Global and Innovation Gateway for All)の略)スクール構想は、具体的には「一人一台端末、高速ネットワーク回線、クラウド活用」いう三点がイメージしやすい。これが本格的に実施される今年度は、子どもたちと一緒に未来を考える絶好の機会と言える。子どもたちが未来に向けて歩み出す第一歩は、きつと期待と不安が入り交じっているに違いない。

私たちが大人もパソコンやスマホを使い始める際には、インスタグラムや詳しい人に教えてもらうことが多かったように、慣れていない子どもにとつては、期待よりも不安が先にあるだろう。GIGAスクール構想(一人一台端末等)が子どもたちと良い出会いとなるように教師はしっかりと導く必要がある。

ただ、教師が忘れてはならないのは、端末はあくまでも手段であつて、学習の目的・内容ではないということである。「主体的・対話的で深い学び」の効果的なツールとして使わなければ、学習の意味がなくなつてしまふ。そこで、GIGAスクール構想における子ども像として挙げられる姿は、次のようにイメージすることができる。

まず、授業の導入で、端末を活用してインターネットで電子辞書のように「分からない言葉や語句」を検索したり、「表示された図や写真」を学習資料に活用したりできる。

次に、「展開場面」として、音楽の学習では「作曲ソフト」を使って曲作りを楽しんだり、体育の跳び箱運動では「動画撮影」で動作分析をしたりできる。

最後に、終末場面では、端末に事前に保存してある「ドリル問題」に個に応じて取り組んだり、「振り返りカード」を個人のデータベースに記入・保存したりすることが出来る。

三 評価の「デジタル化」への期待

指導と評価は、表と裏の関係のように一体的に考えて進められる。そして、授業での指導が日々行われ、日々評価も行われている。評価の面における、データやデジタル機器の積極的な活用は、主に次の三点のメリットが期待できる。

一つめは、見やすさ・分かりやすさである。写真や動画・音声等を記録・保存し、発表や作品により客観性をもたせ、評価を行うことができる。

二つめは、個に応じた学習への対応である。子どもたちの実態や成長に応じて、個別化・最適化を図りながら、基礎的内容から発展的内容に対して評価することが可能となる。

三つめは、業務改善・効率化への可能性が広がることである。業務改善の推進に当たっては、教育の質を維持・向上させる趣旨を周知した上で進めなければならないことは、言うまでもないことである。

四 おわりに

ここまでGIGAスクール構想関係の活用方法やメリット等を述べてきたが、我々教師が忘れてはならないのが、「子どもがファースト」や「人権意識」であろう。ICT偏重に陥ることがないように十分注意を払うことが肝要となる。日頃から、他者に対する言動に「気が付く」ことや「豊かに巡らせる」ことが、「気が付く」ことや「豊かになる」ことに繋がるものである。感性や思考力、そして、それらを豊かに育むことが、GIGAスクール構想における学びに、明るい光を提供してくれることと信じ、積極的活用の道を歩みたい。



原点にもどって

朝日中(大) 夏 迫 満 弘

ある中学校で平成十一年度から教務となつた。私は、翌年度から始まる総合的な学習の時間の計画づくりに頭を抱えていた。どんな計画で学習を進めればよいのか、皆目見当がつかなかったからだ。併せて、次々と中央教育審議会から学校へ下りてくる答申等で、学校現場の教職員が悲鳴を上げていた記憶がある。その頃の忙しさと戸惑いの毎日が、今は新型コロナウイルス感染症対応に変わった。

現在、学校経営を進めるに当たり、行き詰まりの全ての根源が新型コロナウイルスにあるといっても過言ではない。「コロナに負けるな」と声を上げつつも、コロナに振り回されればなしの時を迎えて二年目に入った。そんな中、今年度は、昨年度とは考え方が変わってきていることに気が付いた。これまでは、新型コロナウイルスの発生で学校が休業になったり、行事を中止したりする措置が取られたが、現在はこのコロナ禍にあつて何ができて何ができないかの区別をはっきりさせ、できることを優先させる考え方である。

昨年本校では、奄美市の警戒レベルに合わせた本校の新型コロナウイルスに対する行動目安を全職員で作成した。衛生管理、給食、保健室、部活動、

集会・行事、授業の六つの項目に分け、レベル1の段階では、マスク着用、手洗い・うがいの励行、登校前の検温、そして三密の回避といった基本的な内容が盛り込まれている。これがレベルが上がるに連れて、禁止内容が増えるようにした。

しかし、今年になり市の警戒レベルが最上級の「5」となり、禁止内容ばかりになったにも関わらず、実生活ではそうなっていないことへのギャップを感じ、自校のコロナ対応の見直しを行うことにした。その視点が何ができ、何ができないのかだった。見直しをする中で、衛生管理、給食、保健室といった保護・安全面については、今までどおり厳しめの判断で対応することにしたが、部活動、集会・行事、授業については、その視点に立った見直しが必要だった。まず、部活動については、市の方針に合わせて校内だけの部活動は可能とするが、練習試合、大会等への参加は不可とした。その他の集会・行事、授業については、十分な間隔を開け感染対策を取った実施は可能とするなど、対応内容をかなり見直した。こうした見直しにより、全ての行動が制限されるという意識から少し軽減

されたことで、気持ちに余裕が生まれたように感じた。

だが、最近では、新型コロナウイルス感染症が始めた頃に盛んに使われていた言葉をあまり耳にしなくなった気がする。それは、「命を守る行動を取る」ということだ。この目的のために何をやる必要があるかという、目的意識を持った行動が求められたが、最近では行動内容だけが優先され、それが何の目的のための行動であるかということが薄れてしまっているように思えてならない。そのため、行動について議論する時、それが適切か不適切かの内容だけで語られ、その目的がはつきりしていればすぐ分かりそうなものをと感ずることが多くなった。

私も本校に赴任して二年目を迎える今、昨年と同様に今年も地域行事が実施されなかったら、地域の皆さんと共に過ごす喜びを何も味わうことなく真っ白な記憶で終わってしまうことがとても残念である。これは子どもたちにとっても同じで、中学校生活での本来あるべき思い出が欠けてしまうことが将来に大きな影響を与えるのではと、大袈裟かもしれないが心配でならない。しかし、それは、「命を守ること」を目的として取った行動だったということを明確にしておくことで、正しいことをしたというプラス思考に転化するのではと思う。まだまだ先の光が見えない今ではあるが、原点に立ち戻ることにより、これからも頑張っていけそうな気がする。



光神だからできる教育

光神でないとできない教育

光神小(隅) 中島 清 昌

一 はじめに

本校は、大隅半島の北に位置し、北方には高千穂の峰をはじめ霧島連山を望む標高二百五十mの高原地帯にある。校区には国道や県道及び高速道路が通り、交通の便はよいが、児童数は減少傾向にある。

校区民は素朴で人情味があり、学校教育への関心も高く、学校教育や公民館活動へも協力的である。一方、高齢化が進み公民館運営に関しても役員不足等の問題もある。

児童数は、昭和三十年代に三百名を越すような時代もあったが、現在では十一名と減少している。今後、微増はするものの、極小規模は変わらない見込みである。

二 本校の教育目標

本校の教育目標は、「一人一人が輝き、未来をたくましく生きる児童の育成」である。極小規模校である本校は、児童一人一人をしつかりと把握し、寄り添いながら教育活動を行うことができる。この特性を生かしながら成功体験を積み重ね、一人一人の能力を引き出し、出来ることを増やすことで、苦手なことにもチャレンジしていこうという気持ちで育むことができる。つまり、子どもたちに

自信とやる気をもたせるための教育目標である。

三 教育目標達成のための取組

(一) 成功体験の積み重ね

本校では、日頃からできたことを大いに褒め、子どもたちの行動を価値付けることで、自信をもたせるようにしている。また、日頃の教育活動の表現の場として学校行事を位置付けている。

運動会では、毎年一輪車演技を披露している。練習で積み重ね、難しい技を成功させることで自信に繋がるようになる。学習発表会でも大勢の人の前で練習の成果が発揮できた喜びを味わわせることで次への意欲につなげる。他の行事等でも、目標をクリアしたり、児童代表の経験をしたりすることで、自信を付けることができる。

(二) 個に寄り添う学力向上

誰もが苦手なことがあると、なかなか意欲が出ないものである。そこで、日頃から、できることを増やし子どもの学ぶ意欲を高める授業を行っている。また、土曜授業日の一時間を使って、管理職や養護教諭を含め児童に学習指導ができるようにしている。

る。職員全員でその子の課題に応じた指導を行っている。

(三) 特色ある教育活動

本校には三つの特色ある教育活動がある。一輪車・ボランテア活動・食育である。一輪車は体力つくりと自信をもたせるため、ボランテアは、子どもたちに協力と有用感を味わわせるため、食育は野菜の栽培活動を通して食の大切さを学び、勤労体験をさせるためである。

特筆すべきは、これらの活動は、子どもたち自身も自分たちの学校の自慢と想っていることである。自慢の活動を全校で取り組み、それが対外的にも認められることで子どもたちの大きな喜びになっている。

(四) 夢講演の実施

本校では子どもたちに夢を育み、夢を応援する目的で、本校卒業生の話や絵本作家による読み聞かせ、折り紙飛行機教室等の夢講演会を毎年実施している。先輩たちからのアドバイスや様々な文化の体験を通して、夢をもち、その実現を目指して努力する子どもを育成することがねらいである。

四 おわりに

極小規模校は、人数が少ないためのデメリットもあるが、少人数だからこそできるメリットもある。そのメリットを生かし、模索しながら今後も「光神だからできる教育、光神でないとできない教育」を推進していきたいと思う。

わが校の



学校経営

小規模校のよさや強みを生かした

一人の児童を大切にしている教育の推進



黒木校区
マスコットキャラクター
「クロちゃん」

黒木小(北) 平山 淳郎

一 はじめに

本校は、薩摩川内市の東部、旧祁答院町の北端に位置し、明治九年の創立以来、今年度で百四十五周年を迎える。令和三年五月現在の児童数は二十人で市内最少である。かつて豊州島津家の領地だったことから、校区内には同家関連の石塔群をはじめ多くの史跡等が点在する。

二 学校経営の方針

学校教育目標は「誠実で、心優しく、最後までやり遂げる黒木の子どもの育成」であり、校区の気風として受け継がれている「黒木魂」の三つの精神に基づいている。学校経営の重点を「主体的・意欲的に学ぶ確かな学力を身に付けた子どもの育成」「明るく思いやりのある豊かな心を身に付けた子どもの育成」「健康・安全に生活する心身ともにたくましい子どもへの育成」「地域に開かれた信頼される学校づくり」の四つの柱で整理し、それぞれに対応した十一の視点と二十六の具体策に沿って取組を推進している。

三 特色ある教育活動の紹介(抜粋)

(一) ふるさと・コミュニケーション科の充実
本市独自の学習である「ふるさと・コミュニケーション科」は、故郷を愛し、故郷を

誇りに思い、将来にわたって故郷に貢献していこうとする心情や態度を育てることを目標としている。そこで、地域素材を掘り起こし、効果的に生かした単元を開発した。

小中一貫中期の「わがふるさと祁答院のよさを発見」では、校区内に工場を有する「アサダメッシュ株式会社」の高精細・高強度のステンレスメッシュを使用したスクリーン印刷技術が、パソコンやスマートフォン等の様々な製品に採用されていることから、国内外のエレクトロニクス産業を支えていることを学習した。

また、郷土教育・国際理解教育の充実を図るために、持続可能な開発目標「SDGs」をテーマにした単元を新たに設定した。県アジア・太平洋農村研修センター協力による「水から考えるワークシヨップ」を通して、世界の水事情を知り、普段の生活を振り返ったり、今後の行動の在り方を考えたりする学習を仕組むことができた。

(二) 伸びを実感できる体力づくりの推進
「児童が日常的に運動しやすい環境づくり」「数値を効果的に活用した伸びを実感できる体力づくり」に重点を置き、具体的な取組を継続している。令和二年度の全国

(三) 地域学校協働活動への移行

薩摩川内市では、学校運営協議会が中学校区合同のため、校区ごとの地域学校協働活動を進めにくいという課題があった。そこで、黒木コミュニケーション協議会内に地域学校協働本部を置く独自の推進システムを整備した。

また、小・中学生を対象にした定期的な学習・体験の場として、寺子屋「黒木塾」をスタートさせた。第一回は、県なぎなた連盟の協力を得て「なぎなた体験」を実施し、礼儀・作法や静と動の切り替えの大切さなどを学んだ。地域学校協働活動の核となる活動であり、かごしま地域塾へ登録予定である。

四 おわりに

過疎化による児童数の減少を受け、学校経営にもそれに対応した工夫や特色づくりが求められている。キャッチフレーズである「黒木小だからこそできる一人一人を大切にしている教育の推進」「小規模校のよさや強みを生かした学校づくり」に向け、今後も戦略的かつ具体的な取組を進めていきたい。



未来の社会で輝く子どもを育てるために

加治木小(始) 赤崎 晴 男

一 はじめに

学校教育活動の目標は、子どもたちに生きる力を身に付けさせることであり、その中心になるのが授業である。しかし、授業を充実させるだけでは十分に目標を達成することはできない。子どもたちに身構え・心構えができていくことが必要である。本校ではその土台を健康的な生活習慣の確立と捉え、家庭との連携の下、様々な実践を行っている。ここでは、その中心となる「眠育」と「メディア機器と健康・情報モラル指導」について紹介したい。

二 取組の実際

(一) 合言葉の中に

本校では子どもたちに年間を通してがんばってほしいことを「あいねこ」という合言葉で示してある。「あいねこ」と「お」はおもいやり、「い」はいっぱい食べる(朝ご飯)、「ね」はいっぱいねる。「こ」はこつこつがんばる、である。

合言葉の「ね」については全校朝会で睡眠と脳の発達の話をしたり、機会をとらえてふり返らせたりしている。また、保護者にも資料提供や講話等を行っている。



(二) 「二日の生活設計表」と「生活向上週間」

年度当初に二年生以上の児童に曜日毎の一日の生活設計表を作成させた。決まった時刻に寝て起きるため、メディア利用の時間を意識させるためである。

年三回の「生活向上

週間」では、カードを活用し、「一日の生活設計表」を基に生活をふり返らせている。

(三) メディア機器と健康に関する指導

GIGAスクール構想事業により、学校には一人一台の端末が整備され、教育活動での利用が本格的に始まった。これからの高度情報社会の中ではメディア機器を自分の人生や社会を豊かにするツールとして利活用する能力が求められる。

しかし、利用の仕方を誤ると健康な心身の発達に負に作用する危険性も併せ持つ。技能と知識の習得と同時に、メディア機器が心身に及ぼす影響、情報モラルについての指導も併せて行っていく必要がある。

① 総合的な学習の時間への位置付け

1日の生活設計表(例)

三

おわりに

「子どもが輝く教育」というお題をいただいたときに、現在行っている教育活動の中で子どもが輝いている場面を想像した。しかし、子どもたちは未来の社会を担っていく存在。そう考えると未来の社会で子どもたちが輝きながら幸せに生きていくためには、今何が一番課題で、学校は何をしなければならぬかを考え、取り組まなければならない。

子どもたちが生きる未来の社会は、今よりも便利で多くの情報にあふれた社会であるのは間違いない。そのような社会で、目の前の便利さやあふれる情報にふり回されず、人間らしく心身共に健康で生きる力を持つことが幸せな人生につながると思う。今後も将来の子どもたちの輝く姿をイメージしながら教育活動の充実を図っていききたい。



「先手あいさつ」(心に届くあいさつ)で あいさつあふれる学校に

西紫原中(市) 西原 晃

一 はじめに

本校は昭和五十四年に開校し、本年度創立四十三周年を迎えた。現在学級数十八学級、生徒数五百八十七人の学校である。

本校の教育目標を「自らの可能性を信じ、努力することのできる生徒を育成する」とし、生徒の将来を見据え、日々教育活動の充実に努めているところである。

二 取組の実際

(一) あいさつの大切さを伝える取組

生徒にあいさつの大切さやよさを再認識させるとともに、あいさつあふれる学校の共通イメージを持たせるために全校朝会で話をした。四月中旬に感染症予防のため校庭ではあったが、全校生徒の顔をみて直接話をすることができた。

また、この話を生徒指導主任が発行している生徒指導通信に掲載することで可視化し、再度定着を図ってくれた。通信には次のような生徒の日記も掲載され、教師からの話だけでなく生徒自身の気付きも生かした。「朝、勇気をだして『おはよう』のあいさつを試してみたら、今まで話したことが

なかった人や他の小学校だった人と仲良くなることができました。あいさつの力は偉大です。」

重ねて、あいさつについて道徳科で考えさせたり、学校だよりに取り上げ、保護者等への周知や協力も働き掛けたりした。

(二) あいさつのスキルの習得

対人関係能力の向上等をねらいとして、今年度全校でソーシャルスキルトレーニング(SST)に取り組むことにした。その一回目を四月下旬から五月上旬に行い、あいさつのスキルと自己紹介スキルの向上に取り組んだ。具体的には目が合っても笑顔を見せずあいさつをしないで通り過ぎる場合と顔を見て笑顔であいさつする場合をそれぞれ行い、体験を通して考えさせた。生徒の感想では、「あいさつ一つでその人の印象は違ってくるのだなと思った。」とか「あいさつをするだけで相手にいい印象を与えることができ、お互いにいい気分になれるので大切だと思った。」等一人一人更にあいさつの大切さを実感し、どのようにすることが心に届くあいさつなのか具体的に

に学ぶことができた。

また、三年生は職場体験学習の一環としてマナーアップ教室を開催した。今年度はやむなく職場体験学習自体は感染症予防のため中止したが、外部から講師を招き同教室は予定どおり実施した。ホテルで働いた経験を踏まえて壁を背にして立ち角度を意識しながらあいさつを行うことなどを体験し、難しさや大切さを体を通して学ぶことができた。

(三) 生徒会、PTAの取組

伝統的に生徒会役員が毎朝玄関であいさつ運動を行っている。常時活動に加えて、今年度は本部が五月に、生活部が一月にあいさつの充実を目標として取り組むなど、重点化した取組も計画的に行っている。

一方、PTAの取組として親子での朝のあいさつ運動も実施している。友達のお母さんを見付けてすかさずあいさつしたり、笑顔であいさつをしたら相手が気持ちよくあいさつを返してくれたりと親子で自らあいさつ運動に参加することで、普段ではできない経験をやる機会となっている。

三 おわりに

「先手あいさつ」(心に届くあいさつ)を前面に出し取組を行っているが、新しいことだけでなく生徒会やPTAの活動等これまでの伝統を引き継いだ取組も継続している。これまでの取組に感謝しつつ、新しい試みを加えることであいさつあふれる学校にしていきたい。

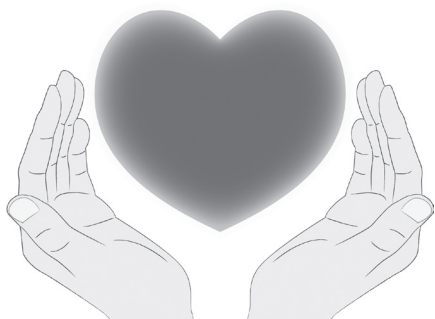


大事なものは見えない

羽月小(始) 原 田 浩 一

令和二年度の卒業式で本校の卒業生が歌った曲は、竹内まりやさんが作詞した「いのちの歌」だった。卒業式当日は、この日に至るまでに卒業生や教師の様々な思いがあり、選曲や練習に時間がかかったことを思い出しながら、聞いていた。しおりに歌詞が掲載されていたので、歌詞を追っていると「大事なものは見えない」という言葉が目にとまった。その歌詞は、大事なものは日々のささやかな生活の中に隠れていて、よく見ないと見えないという内容で、素敵なフレーズだ。確か「星の王子様」にも同じように「大切なものは 目に見えない」という言葉が出てきたことを思い出した。また、以前勤務した市の教育長もよくこの言葉を使われていた。「心は大事ですが、どこにあるのですか。」

心は見えますか。同じように命は見えますか。」と話されていた。そして「学力も同じで、本当に大事な学力は隠れて見えないので、それを引き出すのが教師の力だ。」と言われていた。目の前の卒業生を見ながら、それだけの力や良さを引き出せたのかと反省した。また、忙しさを理由に、子どもたちとの日々のお会いを大切にしてきたのか反省した。私が若い頃、先輩の先生に、「児童理解が深まったというのは、一人一人の子どもの顔を見たとき、すぐにその子どもが長所が五つぐらい頭に浮かぶようになったときだ。」と言われたのを思い出した。「五つはとも無理だな。来年度は、もっと積極的に子どもたちに働き掛けて、一つでも子どもの隠れたよさを引き出してあげなければ。」と思った今回の卒業式だった。子どもたちの歌の一節が心に残るひとことになった。



置かれた場所で咲きなさい

大原小(隅) 上 原 一 宏

初めて教頭になったのが八年前だっただろうか。小さな小中学校に赴任した。校長先生は以前、離島で派遣社会教育主事をしていたときの同僚というか先輩であった。私は、初めての社会教育主事だったが、その方はすでに二地区目で、派遣された町の職員といつも楽しそうに仕事をしていた。三年経って別の市に派遣されたが、その方はすぐ近くの県の職員になっていた。以前からその企画力と周囲をうまく巻き込む話術や行動力に驚かされていた。

その市では、総合型地域スポーツクラブの創設を任されたが、人付き合いが下手な上に企画力も全くないものだから焦ってしまい、その方にとりあえず聞いてみた。すると、今の仕事と全く違う私の話に耳を傾けてくださった。そして、私の前任者に尋ねた方がうまくいくかも、というアドバイスをもらった記憶がある。しかし、前任者が大学時代の後輩だったことから、プライドが邪魔をして聞けず、結局クラブを立ち上げられずにその市を去ることになった。その後、私は鹿児島市の大きな中学校を経験し、冒頭の小中学校に赴任することになる。

初めての教頭職は、これまでに経験したことのない厳しさだった。考えてみれば、私が粗相

をすれば、あとに控えるのは校長先生しかいない。それに甘えていたところがあった。そして、なかなかうまくいかなかったものだから心の中で「次の赴任地ではこんな失敗をしないように気を付けよう。」と、一年目からふざけた考えをもっていた。すると、その考えをお見通しと言わんばかりに「背伸びばかりしないで、足下をしつかり見て、誠実に仕事を果たしてごらん。」と言われた。地域に目を向け、子どもに目を向け、職員に目を向けてみた。今まで、どこに目を向けていたのか……。恥ずかしくなった。こんなにも私を求め、期待している地域・子ども・職員がいるではないか。今いる場所で、誠実に仕事をするので見えてくるものがあった。奢らずに、目の前にある仕事を誠実にしていこう。

「努力はむくわれる」

永田小(熊) 久保 清 一

令和三年四月に開催された「競泳日本選手権」。その大会に出場した池江璃花子選手には大きな驚きと感動をもたらした。

二年前の二月に病を発症し入院した。順風満

帆の競泳人生であり、まさに世界をリードする選手だっただけに世界中が驚いた。闘病中のドキュメンタリー映像は、私自身言葉を失うこともあった。それから二年近くの時を乗り越え、この日、東京五輪の内定を勝ち取った。驚きと喜びの瞬間だった。すぐ後のインタビューで池江さんは大粒の涙を流しながら言った。「つらくて、しんどくても努力は必ず報われる。」この言葉を聞いたとき、私は心に大きな衝撃を受けた。決して真新しい言葉ではないけれど、まさに心に突き刺さる響きだった。

私も教員人生の中で、努力の大切さは時にふれて子どもたちに伝えてきた覚えがある。しかし、この日の池江さんのフレーズは、同じ言葉でも全く違うものに聞こえた。私が考え、言い聞かせた程度の努力とは全く違う次元のものと感じた。

「私も努力してるのになあ。本当に努力って報われるのかなあ。」と少々愚痴り迷う気持ちだが、自分の心のどこかにかあった。この二年間で、池江さんが続けた「努力」とは何なのかを知りたいと思った。

この大会、終わってみれば四冠達成。その活躍に感動せずにはいられなかった。東京五輪開催は揺れ動いてはいるが、その「努力でつかみ取った勇姿」を観たいと心から思った。これから残りの教員人生の中で、努力という言葉をもっと真剣に重みをもって考え、子どもに伝えていきたい。

人間は努力しないと花は咲かない

沖永良部高 室 屋 洋 一

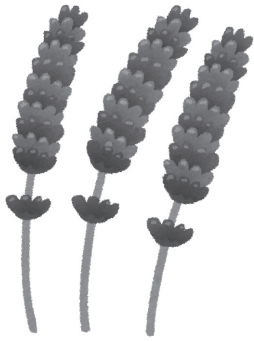
私には教職に就く前に十年ほど金融機関で働いていた前職がある。これまで数多くの先生方が教育現場での貴重な経験をもとに素晴らしいひとことを寄稿されておられるが、あえて前職で頂いたひとことが教職にある今でも忘れられずに残っているのが執筆させていただく。

それは、大学卒業後、就職したばかりで未熟だった私を上司が見かねて諭してくれた言葉である。その言葉は、「春になれば、草や木は自然と芽が出て花が咲くが、人間は努力しないと花は咲かない」である。自然の摂理と人間の道理を分かりやすく説いた明快な言葉であるが、上司は時忘れて親身になって色々な話をしてくれた。実は、上司自身も不器用で大変な苦労をしてこられ、コツコツと努力を積み上げたことで今があるとの経験談であった。心から語られるその言葉に、私自身不覚にも思わず涙してしまった。それからというもの何ごとも手を抜かない努力こそが自信を育む礎となったことは言うまでもない。そして、与えられた場所、人と同じでなく自分なりの花を咲かせればよいんだと心から思えるようになった。

現在、NHK大河ドラマで渋沢栄一が主人公の「青天を衝け」が放送されている。その渋沢

氏が「怠惰の結果はやはり怠惰で、それが益々甚だしくなる位が落ちである。ゆえに人は良い習慣を造らねばならぬ。すなわち勤勉努力の習慣を得るようにせねばならぬ」と著書『論語と算盤』で記されている。まさしくそのとおりであり、人生は努力にあることが職を越えて的を射た教訓であったと改めて感銘を受けている。

私自身も時の流れとともに転職を決意して、教壇に立ち、教頭職を経て現在、校長職という重責を担う立場となった。立場は違えど、今でも常に努力を忘れず自己研鑽に励んでおり、努力の尊さを後進に諭す立ち位置となった。私も前述の上司のように生徒や教職員に寄り添い、心を動かせる人になりたい。やはり、いつの時も努力の丘の上に自己実現の花は咲くのである。



ある日の校長講話



あなたの大事なものは何ですか？

田上小(市) 益山 富誉

みなさん、おはようございます。

今年は、梅雨入りが早く、梅雨に入ってもう三週間が過ぎようとしています。そして、まだまだ新型コロナウイルス感染症が続いています。マスクの着用と手洗いは忘れずに続けていきましょう。

さて、みなさんは田上小学校とゆかりの深い人を知っていますか。そうですね、西郷隆盛です。西郷さんに関係するものが学校にいくつありますか。知っていますか。この「田上小」と書いてある門札と郷土室に飾ってある西郷さんがはいていた袴下ですね。この二つは、学校の大事な宝物です。

先日、もう一つすごいものが見つかりました。これです。これは、今から十五年ほど前に田上

小学校の校長先生をされていた先生から教えていただいたのですが、東郷平八郎が書いた「君が代」の書です。日本に二つしかない貴重なものだそうです。東郷平八郎は、鹿児島県出身の海軍大将です。幕末から昭和の初めまでの激動の時代を生き抜いた人です。一九〇四年に始まった日露戦争では、ロシアのバルチック艦隊を日本海で破ったことで世界でも有名な人です。その人の書が田上小学校に保管されていたのです。これからも大事にしていきたいと思います。

それでは、あなたが大事にしているものは何ですか。心の中に思い出してみましょう。あなたにとって大事なものを失うことがないように気を付けて取り扱っていきましょう。

もう一つあなたに大事にしてほしいものがあります。それは、命です。命はみんな一つしかもっていません。あなたにとって何よりも大事なものになります。そのためにも、自分を大事にしてください。そして、自分と同じように友達も大事にしてください。ニコニコ月間も始まっています。まずは、みんなが仲良く笑顔で過ごすことからです。自分と友達を大事にして笑顔一杯の田上小学校にいきましょう。



集団宿泊学習の出発式

伊集院北小(日) 末 永 勝 也

いよいよ待ちに待った集団宿泊が始まります。この日のために、みなさんは学級活動などで計画作りや役割分担など準備をしっかりとしてきましたね。だから何の心配もいりません。南薩少年自然の家は、私たちの住む所とは景色や匂いが違います。豊かな自然の中で、友達同士で生活することの楽しさを思う存分味わってきなさい。

ただ一つだけ、みなさんにお願ひがあります。集団宿泊学習の三日間を通して守ってもらいたいことです。それは、「いつでも、どんな時でも相手の気持ちや考えを思い続ける」ことです。生活班、炊事班などその時々々のメンバー、少年自然の家で指導してくださる先生、一緒に暮らす他校の児童、バスを運転してくださる方など出会うすべての人に対して、思いを巡らしてください。そうすることで、自分にとって良いことがきつと起こるでしょう。

みなさんがこの学校にいない間、みなさんのことを思い続けている人がきつといますよ。帰ってきた時には、どんな三日間であったか、お土産話をいっぱい聞かせてくださいな。

日本復帰運動

下平川小(大) 林 賢 介

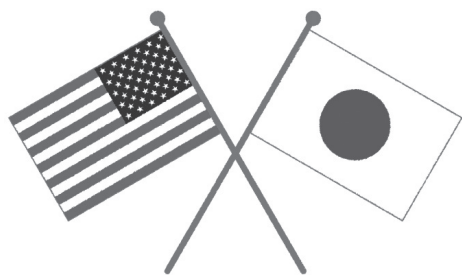
皆さんは十二月二十五日が何の日か知っていますか。そう、クリスマスですね。クリスマスにはプレゼントがもらえて楽しみだと思えます。十二月二十五日は、奄美群島の人々にとってはもつと特別な日なのですよ。

今から七十五年以上前、日本はアメリカやイギリスと戦争をしていました。昭和二十年八月六日広島に、八月九日には長崎にも原子爆弾が投下され、八月十五日に戦争は終わりました。戦争は終わったのですが、奄美群島と沖縄は、日本から切り離されて、アメリカの信託統治下におかれました。本土との行き来も禁止され、奄美の人々は、大変苦しい生活をしていました。日本なのに、日本ではなくなったのです。

そこで、奄美群島を「日本に返せ」という運動【日本復帰運動】が起こりました。その中心となった人が泉芳朗という人です。泉は奄美での活動だけでなく、鹿児島県や日本政府、アメリカ政府にも働き掛け、昭和二十八年十二月二十五日に奄美群島は日本に復帰しました。ここ沖永良部でも復帰運動は行われ、昭和二十七年には、子どもたちから大人まで、日本復帰を祈願し、断食まで行いました。そんな中、沖永良部と与論を切り離した奄美群島を復帰さ

せるという話もあったようです。

これに危機感を感じた奄美群島の人々は、復帰運動を強め、ついに、昭和二十八年八月に、「奄美群島を全面的に返還する」という声明をアメリカ政府が出しました。そして、昭和二十八年の十二月二十五日に、ついに、日本に復帰することができました。おじいちゃんやおばあちゃん、その当時のことを覚えていると思いますので、日本復帰について聞いてみるのもいいと思います。今の生活とは全く違う、びっくりするようなことが聞けるのではないのでしょうか。



話のひろば



心やすらぐ 居場所づくり

川床小(北)

松 永

貢

今年度から本校の三・四年が県の企画部地域政策課の事業「かごしま景観学習」に取り組み、長島町の景観

について学習を始めた。学習を重ねるたびに、長島町の景観が、すばらしいことを実感している。この学習を通して、地域を知り、よさに気づくことで、郷土に対する思いも高まると同時に、こんなすばらしい町に住んでいるという自慢できることが一つできることで、自信につながる。自己肯定感が低いと言われる子どもたちであるが、自慢できることを増やしていくことで、子どもたちの自己肯定感も高まっていくであろう。

二十年ほど前、横川町で社会教育の仕事をしている時のことである。横川町を含む一市六町

が合併し、霧島市が誕生する前に、「合併すると横川町には何もないから忘れられるかもね。」と心配する声を多く聞いた。当時、横川町には、歴史的に貴重な大隅横川駅や薩摩藩の財政を支えた山ヶ野金山跡など貴重な歴史的財産があった。そこで、町づくりの研修会等で話し合いを重ね、今あるものを生かして、「横川と言えよ」というものを作ろうと「山ヶ野金山ウォーキング」を始めた。当時の歴史や金山の賑わいを感じてもらえるよう、参加者も制限した。とにかくみんなで参加者をもてなそうという思いでスタートした。今では、三百人の参加者を四百

人のボランティアでもてなすイベントになり、二十年以上続いている。小さな集落を中心にしたイベントだが、横川中の生徒がボランティアガイドを務めるなど、横川町に住んでいる多くの人たちが関わっている。山ヶ野集落に住んでいた高齢の女性の方は、割烹着を着て、昼食会場の入り口で「ゆくさ、おさいじゃした。」とあいさつする役を担い、十年以上多くの参加者を笑顔で迎えている。歳を重ねて大変だということもあつたそうだが、参加者の笑顔を見て、また来年も頑張ろうという気持ちになったそうだ。一年に一回のイベントではあるが、「また来年も」という生きる力になったと思う。

子どもたちも、自分のいいところを一つでも見付けて、自分という存在が、人のために役立っているということを実感できれば、「自分はここにいていいんだ。」という安心感が生まれる。子どもたちが安心して過ごせる居場所を見付けられるように、これからも一人一人のよさを伸ばしていく努力を続けていきたいと思う。

初めての校長職、 初めての小学校

古仁屋小(大)

鶴 田 和 仁

教職三十三年目を迎えるこの四月に、私は小学校に赴任することになった。昨年度ま

では中学校に勤務してたので、小学校勤務に希望と不安を抱きながらのスタートであった。義務教育学校には、中学校文化と小学校文化があるという話も聞いていて理解していたつもりではあつたが、現実には直面すると戸惑いを感じながら現在に至っている。

中学校に勤務していた頃は、部活動を中心に生徒指導に取り組んできた。学習指導では専門

教科の授業を、また学級担任として特別活動、道徳などの充実を目指して日々取り組んできた。ところが小学校ではスポーツ少年団があり、放課後に保護者が主体となって活動を行っている。一方で学級担任制の小学校では、担任が一つのクラスを受け持ち、ほとんどの教科の授業を行っている。しかも中学校のように空き時間も少なく、昼休みも業務をこなしている。

また、勤務していた多くの中学校では、全校一斉に朝読書に取り組んでおり、静かな中で一日の学校生活が始まっていたが、小学校では、毎朝大きな歌声が聞こえてくるのが新鮮だ。これも小学校ならではと感ずる。さらに、本校では朝の打合せがなく放課後に行うようになっていたので、朝の職員室には管理職しかおらず、がらんとしている。不思議な感覚だ。しかし、放課後になると職員室の空気は一変する。職員会議や職員研修、個別指導などの時間に充てられ、職員の活発な意見交換の場となり充実した時間であると感じる。「クラブ活動」がまだあるということにも驚いた。英語教育やプログラミング教育といった新しい学習が始まる一方で、子どもたちの楽しみにしている活動は残っているのだと思うことである。

教職を志した動機は中学生の時の恩師に憧れ

たからであるが、違う校種に赴任できたことは有り難いと感じている。小学校の先生たちには中学校の様子を語り理解してもらい、小中連携の重要性を伝えられることは、私にとって大きな役目の一つだと思っている。小学校での生活は、まだ二か月しか経過しておらず戸惑うことが多いが、子どもたちや保護者、さらに地域のために尽力することは校種を問わず変わらないことである。微力ではあるが精進していきたい。



人との関わり合い

波野中(隅)

船間 秀 仁

校長職として赴任してから、新型コロナウイルス感染症への対応が継続している。昨年度、PTA活動や地域行事などが中止される中で、保護者や地域の方の顔と名前を覚えることも例年より時間がかかった。また、普通にできていたことができなくなった。ウイルスの恐怖だけでなく、人の言葉の怖さや人と人とのつながりが希薄化することの影響も

問題となっている。

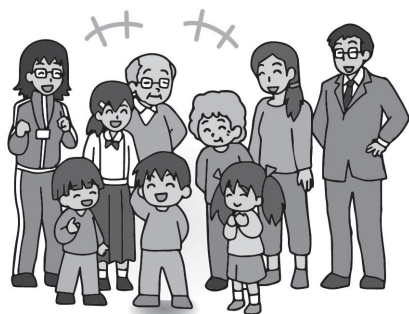
そのような中、昨年度、校区の高齢者の方々が振興会対抗で行うグラウンドゴルフに参加する機会があった。高齢者の中には、ホールインワンを何回も出す方がいて、年齢を感じさせない打ち方と、マスクを着用し距離を確保しながら会話を楽しみ、笑いの中でプレイされていた。年齢差はあるが、私自身も一緒に楽しむことができた。

コロナ禍において、外出や人と会う機会の減少が、特に高齢者の健康に深刻な影響を与えているという調査結果が出ていた。友人や地域の人とのコミュニケーションが減り、認知機能の低下や体の機能が衰えるなどの症状が見られるようだ。グラウンドゴルフを楽しむ高齢者の方と会話をする中で、改めて「いくつになっても、人は人との関わりの中で生きていくことが大切だ。」と感じた。

学校現場を振り返ってみても、コロナ禍において交流の場や学校行事などで人と関わる機会が減ったことは、生徒たちに何らかの影響を与えている。学校の臨時休業を経験して、友達や先生方との日常の関わりの意義を実感した生徒たちもいたことだろう。本校のような小規模校は、生徒たちに学校以外の方と関わりを持たせ、

多様な考え方に触れる機会が大切である。職員には、コロナ禍においても感染症対策をとりながら、できるだけそのような機会を計画するようには伝えている。

「令和の日本型学校教育」の答申の中で、人間同士のリアルな関係づくりは社会を形成していく上で不可欠だと書いてある。Society5.0時代においても、リアルな関わり合いや体験を通じて学ぶことの重要性を感じている。



読書案内



■有川真由美 著

みるみる幸運体質になる！

「自分ほめ」

瀬々申小(市) 谷山 幸広

タイトルの「みるみる幸運体質になる！自分ほめ」と帯の「自分自身に最高のプレゼントを贈ろう」の言葉に惹かれて手に取った。

管理職となつてからは、できるだけほめて伸ばそうと、職員の様子を注視していたが、振り返ってみれば自分自身はほめられたという記憶があまりない。ならばこの本を読んで、どうにかして自分を自分でほめてあげよう、少しでも幸運体質になればいいかなという気持ちをもちたところである。

読んでみて驚いた。筆者がよくないと述べて

いることを、私は自分に言い続けてきたからだ。幸運体質になるどころか、全く真逆の体質になつているということである。

「自分ほめとは、自分自身で自分にいいねを出していくことです。ほんとうの自信とは、ありのままの自分を認めること、そして自分の小さな期待に一つひとつ応えることによつてつくられていくものです。それは、一〇〇％自分の力であり、自分をいちばん幸せにする選択ですから、試しに一週間、自分ほめを実行してみてください。これまでムダに自分を責めていたことがわかつて、ものすごく気がラクになります。人生が楽しく思えてきて、ウキウキとした気持ちになるかもしれません。顔つきが明るくなり、目に力が出てくるはずですよ。自分を認めることは、ほんとうの自信をもつ唯一の方法なのです。」という筆者の考えから、自分ほめの効果や自分ほめのコツが述べられ、自分ほめの習慣づくりとして具体的な七十八の例が示してある。

なるほどと納得することはかりであるが、幸運体質とは真逆の私には、実践することは容易ではなく、何度もこの本をめくりながら自分ほめに努めている。

自分ほめの例を読み進めながら、自分をほめることで、前よりも自分を好きになつていくことが実感できる一冊である。

秀和システム 一三〇〇円

■三浦綾子 著

命ある限り

中福良小(南) 折田明世

三浦綾子が文中で詩を引用している。

ここに理想の煉瓦を積み

ここに自由のせきを切り

ここに生命の畔をつくる

つかれて寝汗掻くまでに

夢の中でも耕やさん

学生時代、三浦綾子の『石ころのうた』を読んだ。こんな先生になりたいと思った。一日も早く追いつきたくて、新任の頃は学校に夜中まで残って仕事をしたものだ。

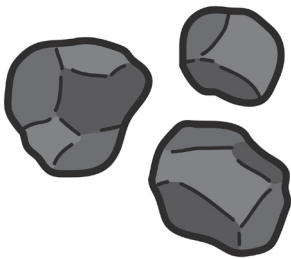
今でも、年度初めの学校経営方針説明の際には、『石ころのうた』から資料を作り、紹介し、職員一同、初心を忘れないように努力している。『石ころのうた』の文中で、六年生の担任をすると同窓会に呼んでもらえるから一度はした方がいいよと校長から薦められた三浦綾子は、「校長先生、私は、子どもたちから忘れられてもいいんです。ただ、毎日、火花を散らすような真剣さで子どもたちに向き合いたいだけなんです。」と答えた。この本にも、こうした命がけ

で毎日を過ごして生きている三浦綾子の真剣さが随所に感じられる。冒頭の詩も、すごい詩である。極限の貧しさの中で、呻きながら詩を生み出している。

小説家は読まれた人の数ほど作品を書いたことになるといふことも述べている。教師という仕事に置き換えると、「教師は、担任した子どもの数だけその人生を背負っていることになる」ということにでもなろうか。人が人を育てる仕事をしている以上、このような命がけの姿勢で子どもたちに向き合わないといけない。改めて、そう思った。

この本を読み、決意を新たにしたい。退職まであと数年。「退職したら何をして第二の人生を過ごそうか。」などと考えるのではなく、毎日を、火花を散らすような真剣さで子どもたちと向き合っていかなければいけないと。

角川文庫版 六四〇円



■野村克也 著

野村の金言

岳南中(熊) 古里和彦

自分が野球をしていたころは、そこまで野村監督のことを好きではなかったのが正直な気持ちである。

しかし、平成十七年に発売された「野村ノート」という書簡は、配球術から采配、選手育成法など、指導者としての在り方が学べる内容になっていた。実際、野球部の顧問をしていた時、「ボヤキ」を真似てみたところ、選手たちが少しづつではあるが、私の考えていることを理解して、自分たちで動いてくれるようになってきた。それからは、テレビでの発言等を注視するようになった。そんな時に、コンビニの棚でこの本を見つけて早速購入したところである。

本書は、野村監督が現役時代、監督時代、解説者時代に残してきた「名言・語録」を軸に構成されており、金言と解説のセットになっていることで、私のような者でも読みやすい構成になっている。

昨年度、新任校長として本校に赴任して、校

長という役職の責任の重さはもちろん、リーダーとして学校をどのようにしたいのか。職員をどのように育てたいのか。日々考える中で、「野村再生工場」とまで言われた野村監督の考えは、自分を見つめ直し、リーダーとしての考えや心構えの参考になると考えている。迷ったとき、悩んだときに開けるように、校長室の机の上にも置いてある本の一つである。

この本の最後の金言が、「監督とは羅針盤である」という言葉だ。これを「学校」で読み替えると、「校長は羅針盤である」ということになる。リーダーは、児童生徒や教師を簡単にあきらめさせてはいけない上に、さらなる高みへと導いていかなければならない。校長は、羅針盤だ。羅針盤は正しい方角を指し示すために存在する。次の進歩へと学校を向かわせるこそが、校長の仕事なのだ。

この言葉を肝に銘じて、これからも学校経営に邁進していく。

セブン&アイ出版 六三〇円＋税



■ 蒔田晋治 著

教室はまちがうところだ

錦江湾高 福永 広 隆



教室はまちがうところだ

みんなどしどし手を上げて
まちがった意見を言おうじゃないか
まちがった答えを言おうじゃないか

まちがうことをおそれちゃいけない
まちがったものをわらっちゃいけない
まちがった意見をまちがった答えを
ああじゃないかこうじゃないかと
みんなで出しあい言いあうなかでだ
ほんとのものを見つけていくのだ
そうしてみんな伸びていくのだ

しかたがないから先生だけが
勝手にしゃべって生徒はうわのそら
それじゃあちつとも伸びてはいけない

(出版社へ掲載について承諾済み)
子どもの未来社 一六五〇円

錦江湾高校のみなさんへ

まちがいをおそれず
挑戦を楽しむ

それが『成功への近道』

挑戦するみなさんを

応援しています

令和三年 四月吉日

鹿児島県立錦江湾高等学校

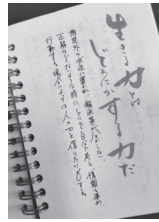
校長 福永 広隆

日々、業務に専心していると、ふとした拍子に自分の考えや判断は正しいのか、この頑張り
に意味があるか等々、迷ったり失意の念を抱い
たりすることがある。私の場合、そんなときに
いつも「言葉」に救われてきた。新聞や雑誌、
読みかけの書籍、講演会、プロレスラーの言葉、
歌の歌詞……。形は違えども、「言葉」によつて
心が「調えられて」きたように思う。

今回、このような寄稿の機会に恵まれ、自分
なりにメモ帳を整理してみたので、恥ずかしな
がら紹介してみたい。これらの言葉がこの小稿
を読まれる方の心にヒットするかどうか自信は
ないが、一編でも心に残った
り、ヒントになつたりすれば、
幸いである。

なお、取り上げた言葉の出
典はなるべく記載するが、記
載なしは出典が分からない、
もしくは、私が勝手に紡いだ
言葉である。御了承いただきたい。

趣味・文芸



【根本に据えたい心の土台】※状況の変化や見
える世界が重視される今こそ大切にしたい

- ・ 無常(全て移り変わるからこそプラスに)
- ・ 根はみえねんだなあ(相田みつを)
- ・ ものの中身は、目では見えないってこと

【星の王子様】のキツネの言葉

- 【心構え】※「構え」は攻にも防にも通じる
- ・ みなさん、元氣ですか？元氣があれば何で
もできる！(アントニオ猪木)
- ・ 受けの美学(プロレス哲学)
- ・ 変えられないものを受け入れる心の「穏や

かさ」と、変えられるものを愛する「勇氣」
と、その両者を見極める「知恵」とが備わ
りますように(善福寺住職 長倉伯博)

【バランス思考】※脱「右往左往の堂々巡り」
要は、バランス(過ぎたるは…)。
心の振り子があまり振れないようにしよう
…ではなく、振り子を「感情の軸」のなる
の手に限る(デール・カーネギー)

心は言葉を紡ぎ、言葉は心を調える

鹿島小(北) 東 條 睦 宣

べく中央に向け続けること(メル・ギル)
右と言われたら、あえて左も見る、その振
り幅の広さが豊かで確かな判断を生む
誰かにとつてのパーフェクトは、誰かに
とつての不完全(桜井和寿)

【悩み、努力、克服】※マイナスさえプラスに

- ・ 高ければ高い壁の方が登ったとき気持ちい
いもんだ(桜井和寿)
- ・ 寒風に咲いた花は香りが高い(岡本一志)
- ・ 「できない」ではない、「できる方法がま
だ見つかっていない」だけだ
- ・ 一息災(無病を願いたい)が…)
- ・ マイナスの経験をした人は有利です、して
ない人は、人の気持ちがわからなくなつて

いる、わからないことすら気づかずに生き
てしまふ(山田太一)

【人間関係づくり】※言葉は人間らしさの発揮
・ 幸せの花は、相手と自分との間に咲く
(岡本一志)

行く言葉が美しくこそ、返る言葉も美し
い(旧某市教育長)

【教育】※繊細に大胆に

- ・ 心は言葉を紡ぎ、言葉は心を調える
- ・ くとうばに、じんかねやいらん(言葉にお
金は一円もかからない、いい言葉を使いな
さい 奄美の言い伝え)
- ・ 習慣は能力を超え
る、学力とは「学ぶ
力」である(旧某市
教育長)
- ・ 「生きる力」とは、
どうにかする力だ
- ・ AさせたいならBと

言え(岩下修)
○○中学校の生徒たちよ！
シャツを出さずに、結果を出せ
スカート上げずに、成績上げる
眉毛抜かずに、ライバルを抜け
(ある学校の校長室に掲示されていた言葉)

最後に、担任時代、運動会後の打ち上げで当
時の学校長が熱く語ってくださった『教育はね、
きつちりとしてあげばしなさいよ』の言葉。ずつ
と頭の中を廻り続ける教職生活最大のテーマで
ある。みなさんなら、どう解釈されますか？

郷土の紹介



魅力あふれる硫黄島

三島硫黄島学園（鹿）石岡 秀久

硫黄島は、鹿児島港から南南西へ海路一〇八

キロの距離にある周囲一四・五キロ、約五十五世帯、人口約一四人の島である。硫黄島というと全国的には東京都小笠原村の「硫黄島」が有名なため「薩摩硫黄島」と表記される場合もある。本島は三島村の三島（竹島・硫黄島・黒島）の中央に位置しており活火山の硫黄岳（七〇四メートル）は毎日、白い噴煙を上げている。鬼界カルデラの中央火口丘にあたり、絶え間なく噴出する温泉により七色の海と表現されることも多く、島内の東温泉（野天風呂）とともに映えスポットとしてメディアに取り上げられる機会も多い。火山の島ゆえ、植生は黒松・椿・ガジュマル・リュウキュウ竹（大名竹）等で硫黄ガスや潮風の影響により農業には不向きな土地である。主な産業は畜産業であり、本土へ出荷している。

硫黄島に限らず三島それぞれの生命線となっ

ているのが「（村営）フェリーみしま」である。食料や生活物資、給食物資、公文、郵便物等すべてを運搬している。天候や運行状況にもよるのだが月曜日を除くほぼ毎日出入港している。（硫黄島港～鹿児島港は約四時間）主に教頭が通船時に学校関係の物品の運搬を行っている。そのほかに交通手段として「みしまⅡ（船舶）」も利用可能であり、硫黄島には空港があることから航空機の利用（予約した上で、月・水曜日のみ利用可）もできる。このようなことから、硫黄島は三島の中で最も交通に恵まれている。

硫黄島は季節ごとに様々な行事が行われ、伝統が引き継がれている。壇ノ浦の合戦から生きながらえた安德帝墓所、僧俊寛の流刑地として俊寛像が建立されており、地域住民が大切に管理している。そして、俊寛の魂を慰めるための「柱松」という鬼火たきのような行事がある。また、「八朔太鼓踊り」（旧暦八月一日、二日、仮面神「メンドン」も大暴れ）や「クセンボ」が男性のみが参加する行事、女性のみが参加する「九月踊り」など旧暦や男女別で行われるなど古くから継続されていることがうかがえる。と同時に新規の島民も参加できることから、時代に合わせて柔軟に変化している島でもある。

硫黄島の特徴としては国際的な面があると言える。外国籍の出身者やJICAでの勤務経験者などフィリピン・エストニア・カナダ・ガボン・マダガスカルなど多彩である。地域や学校で取

り組んでいる「ジャンベ（西アフリカの打楽器）」演奏も盛んで、ジャンベを学びたいというジャンベ留学生も受け入れられていることから、間口が広く懐の深さを感じる島である。ジャンベを縁にギニアとの交流も続いており、東京オリ・パラではホストタウンも務めることになっていった。これらの交流も国際的ではあるが、風景も国際的である。かつてのリゾート開発時に持ち込んだクジャクが自然繁殖しており、そこかしこで野良クジャクが見られる。牧場の風景は、牛・クジャクと大海原のコラボで「果たしてこは、日本か」と感じることも間違いはない。

三島村は二〇一五年に日本ジオパークとして認定を受けている。三島村・鬼界カルデラジオパークは、おそらく日本で最も小さなジオパークである。コロナ禍が収まり、観光可能となつたら是非、硫黄島への来島を勧める。硫黄島の宿泊は五つの民宿、トレーラーハウス、冒険ランド硫黄島（鹿児島市）がある。釣りの猛者ともなると十三時半のフェリーで来島し、翌朝の出港まで夜釣りをする者もいる。

最後に、硫黄島は勤務地としても魅力にあふれているので紹介したい。三年勤務地で給料も高い上、支出も少ない。新規参入者にも親切で、適度な距離感もある。郵便局・駐在所・お店・自販機・診療所・カフェ？もある。豊富な家族の時間。通販等の利用で快適（個人の感想）。

是非、教職員へ硫黄島勤務を勧めてほしい。

*** こころの詩 ***

夏の日の歌

青い空は動かない、
雲片きれ一つあるでない。

夏の真昼の静かには
タールの光も清くなる。

夏の空には何かがある、
いぢらしく思はせる何かがある、
焦こげて凶ひまはり太い向日葵が

田舎の駅には咲いてゐる。

上手に子供を育てゆく、
母親に似て汽車の汽笛は鳴る。

山の近くを走る時。

山の近くを走りながら、
母親に似て汽車の汽笛は鳴る。

夏の真昼の暑い時。

中原中也

一般財団法人校長会館だより

教育長異動

○新任 令和三年六月二十七日付

曾於市 中村 涼一 氏

(前天降川小学校長)

○再任 令和三年七月六日付

長島町 大浦 慶子 氏

※ 6月号で天城町院田教育

長の前任校は兼久小学校の
間違いですので、訂正並び
にお詫びいたします。



季節の言葉「白南風」

白しろはえや字はえ字する窓の時はえ明り

正岡子規

梅雨が終わり空が明るくなった頃、南東
方面から吹いてくる夏の季節風。

暗い梅雨空に吹く南風を黒南風というの
に對して、梅雨明けの明るい空に吹く風を
白南風という。

初夏の爽やかな空を連想させる言葉です。

編集

後記



一年前の今頃は、来年になるとコロナも収束して、穏やかな日常生活に戻っていると誰もが信じていましたが、その思いは打ち破られました。現状は、校長先生方が先頭に立ち、まだまだコロナと闘う日々が続いています。本校でも、運動会は実施できませんでした。保護者は体育館に入らず、リモートでの応援でした。こうした工夫を各学校でも引き続き行っていると思います。本当に御苦労様です。さて、感染症拡大の心配はありますが、一年間延期されていた「東京オリンピック・パラリンピック」の開幕が近づいてきました。この号が発刊される頃には、開催の有無や観客数の上限等が決定されていると思います。国道三号線を使って本校へ向かう道沿いに、銅像が建っています。以前は誰の像かも分からずに見過ごしていましたが、一昨年の大河ドラマ「いだてん」を見ていて、疑問が解決しました。なんと、アムステルダムオリンピックの水泳で初めて日本選手で金メダルを取った「鶴田義行」の生家に建てられた銅像だったのです。まだまだ鹿児島には、知られていない世界で活躍した人物がいると感じたところ。もし、オリンピック・パラリンピックが開催されたら、鹿児島出身者だけでなく日本代表選手全員を応援して盛り上げたいと思います。子ども、参加する選手全員を応援しましょう。子どもたち、夏休みが終わって選手たちが頑張ったことについて話すことが、今から楽しみです。

最後に業務多端な中、玉稿をお寄せいただきました皆様方に心から感謝いたします。

土井靖之(皆与志看護学校)